

研究を進めるに当っての尾張藩に関する知識

No. 1

序説 尾張藩を研究するに当って最低限必要な通史をサラリと述べてみようと思う。

「藩」というものは周知の如く、1600年「関ヶ原の戦い」に於いて、勝利をおさめた徳川家康の構想に基づいて、確立された行政区画と言えよう。

又これは、政治・経済の面において、ある一定のワケ内で極めて特異性を持つものである。このような「藩」の中で尾張藩は、水戸・紀伊両藩と共に将軍家と直接結ぶものとして、開幕以後明治に至るまでその動向は注目に値する。

§1 「藩成立以前の尾張」

まず手始めに、藩が成立する前、すなわち日本というものが統一されてから尾張藩が形成されるまでは、いかなる過程をたどったのであろうか？

大化の改新(645)以前、すなわち氏姓制度の時代には「尾張国造(ワタリミヤツコ)」と「吾湯市県(アユチノアカタ)」が置かれ、改新後は中嶋・海部・丹羽・春部・愛智・智多の八郡をもって尾張国とした(注；郡とは「大化の改新」

の翌年だされた「大化の改新の詔り」に基づくものである)。なおこの地名は一部残存している(丹羽・中島等)。聖武天皇時代の国府・国分寺も残存している。中世に至っては、守護は小野・中条・名越氏と変遷する。南北朝時代(1368～1392)以後は斯波氏の領国であった。応仁の乱(1467～1477)後織田氏が守護権をにぎる。(参；織田氏は斯波氏の守護代であったが主を倒す＝下剋上)信長の代には統一を完成、豊臣を経て徳川へと受け継がれた。

§2 「尾張藩通史」

江戸時代、尾張一国と美濃・信濃の一部を領した大藩である。御三家の筆頭として重きをなした。

1607年(慶長12年)、徳川家康の九男義直が甲府から清州に移封され、さらに同10年、名古屋に移り、加藤清正ら諸大名の助役によって名古屋城を完成、居城とした。二代光友の代までに藩政は整備され、諸組織が確立した。特に1665年(寛文5年)木曾木材事業の藩営化は注目される。七代宗春は将軍吉宗の勤儉政治に反した積極的方針をとった為、家中の生活は自由に流れ、城下の風俗は、はなやかとなり、演劇や遊里の繁栄はめざましかった。このため藩財政は窮乏して、1739年(元文4年)宗春は幕府から隠居を命ぜられる。次の宗勝・宗睦の代は藩の中興時代で、儉約と綱紀粛正に努めた。学芸も栄え人材が輩出した。しかし以後斉朝・斉温(なりはる)・斉荘(なりたか)・慶藏(はしづぐ)と続くが、藩政は退廃して、幕末を迎える。十四代の慶勝

は四谷高須家より入ったが、家中はじめ百姓町人から、その入望と善政を期待された。しかし彼は徹底した攘夷論者だったので、紀伊徳川慶福の將軍継嗣問題では松平慶永、水戸文昭らと共に、これに反対して、安政5年7月に幕府より隠居謹慎を命ぜられた。尾張藩では慶勝の弟茂徳(もちなが)を高須家より迎えて、十五代藩主とした。この時期にあたって藩論は軟硬二派に分かれ、前者は佐幕派となり、後者は反幕派を唱えて金鉞組と称した。慶勝の罪が赦されたのが、文久2年。2年後の元治元年には幕府より征長総督に任ぜられた。勤王か佐幕か、激しく揺れ動く時代の激浪の中で藩祖義直の遺訓と血の絆の板挟みにあった尾張藩は、あまりにも微妙な立場にあった。

§3 「藩主寸観」

A. 義直；將軍秀忠にとっては異母弟であり、親愛の情にあふれ家康の死後は、よくその遺言を守り誠意をつくして幕府につかえ、卒直に進言して、將軍の權威を確立することに貢献した。しかも世子光友のために家光の女を夫人として迎えたので尾張家の權威も、また重きを加え、はるかに諸大名に越えるものがあった。

B. 宗春；將軍吉宗の幕政改革の才針に不満をいだき、独自の見識を立てて、藩政をおこなった。かれは相継後までもなく「温知政要」をあらわして、京都から出版し、幕府の緊縮政策と干渉主義を批判し「愁」をモットーとして、權威主義をしりぞけ、放任政策を宣言した。しかしいろいろな弊害があらわれて、ついに退隱謹慎を幕府より命ぜられる。

C. 慶勝；水戸家からはいて將軍職についた。慶喜とは、従兄弟にあたり、また佐幕派の主力であった会津、および桑名の両城主とは、足兄弟の間柄であり、政界に於ける立場は微妙であった。將軍慶喜の大政奉還があつて、王政復古が断行され新政府が京都に成立すると慶勝は、議定の要職に任じられた。ところが名古屋では、佐幕派の人々が幼主義官を奉じて江戸にはいり、幕軍に投ずる計画があるとの風聞が伝わって動揺がおこった。そこで彼は、渡辺在綱ら三人の家臣を斬り、つづいて、その同志を処刑した。これは、佐幕派をのぞいて藩論の統一をはかるためとった非常の措置と思われる(青松葉事件)。

§4. 「家臣団の構成」

尾張藩は義直を中心として形成された大名家であり、その家臣団は、もとより家康の構想に基づいて構成されたものであり、家康はその統政に力を入れた。

客としたと思われる。

No. 3

この時臭における名古屋築城は、極めてその結集に力を入れた。その家臣は、序列に従って城郭内及び隣接地帯に屋敷を指定され新城下町建設の中核となった。その後義直は家康のもとで成人し、政治的に教養を身につけ文武の体験をつんで、元和二年には、本格的に名古屋に入居し、駿府滞在中に従士していた家臣もすべて名古屋に集結することになり、統一的な家臣構成がここに成立した。その後義直の代から千代光友にかけてさらに拡大されたが、十七世紀末には、ほぼ固定した。“士林洵洵”によると、九百八十余りの家が登録されている。このように封建社会の基礎となる主従関係も除々に確立されていった。ここでその数的な変遷をみていく。

十七世紀中 ● 921人(百石以上) ➡ 十八世紀末 ● 2066人(目見以上)

➡ 十九世紀中 ● 2284人(目見以上)

参 “士林洵洵”

三代綱誠のとき堀真高が幕府の寛永諸家図伝になら^氏て家中諸の系図と由緒について編集に着手し、八代宗勝のときになって松平^氏考雲がこれをうけついで延享二年(1745)に原稿を完成。

参Ⅱ 尾張藩年表

No. 5

1600	慶長5年	松平忠吉尾張に就封。義直生まる。
1603	慶長8年	義直甲斐に就封。
1607	慶長12年	忠吉死去。義直甲斐より尾張に封。
1608	慶長13年	尾張の検地終る。
1609	慶長14年	家康名古屋城築城を決。
1612	慶長17年	成瀬正成・竹腰正信、大い執政となる。
1614	慶長19年	義直、冬の陣に出征。
1615	元和元年	義直、夏の陣に出征。
1616	元和2年	家康死去。義直駿府から名古屋に移る。
1633	寛永10年	軍役令制定
1650	慶安3年	義直死去。光友襲封。
1661	寛文5年	軍役改定。
1693	元禄6年	光友家督を綱誠に譲る。
1699	元禄12年	綱誠死去。吉通襲封。
1713	正徳3年	吉通死去。五郎太襲封・死去。継友襲封。
1730	享保15年	継友死去。宗春襲封。
1732	享保17年	宗春、幕府から詰問される。
1739	元文4年	宗春蟄居。宗勝襲封。
1747	延享4年	士林汙濁完成。
1753	宝暦3年	直訴箱設置。
1761	宝暦11年	宗勝死去。宗睦襲封。
1783	天明3年	明倫堂・継述館設置。
1793	寛政5年	軍役改定。
1799	寛政11年	宗睦死去。斉朝襲封。
1827	文政10年	斉朝家督を斉温に譲る。
1839	天保10年	斉温死去。斉莊襲封。
1845	弘化2年	斉莊死去。慶臧襲封。
1849	嘉永2年	慶臧死去。慶勝襲封。
1856	安政3年	藩財政を有力庶民に公開する。
1858	安政5年	慶勝隠居謹慎。茂徳襲封。
1868	明治元年	名古屋、犬山、今尾三藩に分立。